農村地区での生活環境の変化に伴う家族の育児参加のあり方に関する研究

太田　文博　，石川　貴美　，佐々木睦子
栗山　孝子　，清水　昱子　，大谷和佳子

要約：当支所では、家族の育児参加についての検討から、平成２年度からＩ町において母親の交流と児の観察の場づくりとして「赤ちゃん教室」を開催した。また平成３年度は、日中の保育者である祖父母の抱える問題を解決するため「孫親学習会」を開催した。「赤ちゃん教室」や「孫親学習会」の評価をするとともに、アンケート調査の結果を参考に、今後の乳幼児健診事後指導や家族の育児参加および幼児教室運営のあり方について検討した。

見出し語：孫親学習会　赤ちゃん教室　家族の育児参加

はじめに

Ｉ町の家族の形態は、複合世帯が60％で、日中の育児は主に祖父母が担当している現状である。このような現状において「子育て」について家族の意見が食い違うこともあり、「ちょっと気になる子」に関していかに育児に係わる家族の「気づき」の場にするかが問題であった。

研究方法

1. ３歳未満児を持つ祖父母を対象に孫親学習会を開催し、終了後アンケート調査を実施した。

2. 赤ちゃん教室の評価と母親の育児相談相手についてのアンケート調査を実施した。

3. 幼児教室の参加者の年令から乳幼児健診の事後指導のあり方を分析した。

結果

1. 孫親学習会について

家族の育児参加のあり方、祖父母の役割を考えるために、０歳から３歳児を抱えるＩ町の祖父母を対象に「子育てにおける家庭の躾と人間形成」について孫親学習会を開催した。日曜日に開催して多数の参加者を期待したが、５０歳から７０歳代の男性５人、女性１９人と対象者の約２割の参加にとどまった。しかし、終了後のアンケート調査では、孫育てに関する祖父母の思いが感じられた。

秋田保健所五城目支所（Gojyoume Branch of Akita Public Health Center, Akita Pref）

アンケート結果は以下の通りである。

（回答者　22人）

1)孫を見ていて困ること

病気やけがをした時	17人	77.3 %
離乳食の与え方が難しい	3人	13.6 %
遊ばせ方がわからない	2人	9.1 %

2)孫について家族間の話し合いの場

ある	21人	95.5 %
ない	1人	4.5 %

3)育児についての意見の食い違い

ある	14人	63.6 %

（具体的には）

おやつの与え方	9人	64.3 %
離乳食の与え方	3人	21.4 %
躾の仕方	2人	14.3 %

以上の結果から、日常の育児を任されている祖父母の一番の心配は、病気やけがをした時で、育児について話し合うが、おやつの与え方や躾等で意見の食い違いが見られることがわかった。健診会場で若い母親達から、日中子供をみてくれる祖父母に遠慮して自分の考えている育児ができないという声が聞かれるが、祖父母自身も悩んでいることがわかった。

2.赤ちゃん教室について

表1　対象・方法及び実績

対象	3か月児をもつ母親
開催	毎月1回
実施内容（流れ）	・受付 ・身体計測及び個別相談 ・グループ学習 自己紹介 意見交換 （育児をしてみての感想・経験談等）
実績	平成2年4月～平成3年8月まで17回開催 対象者の73%が参加 （対象者 78名　参加者 57名）

表2　回答者の内訳

		祖父母同居		出生順位			母の出身地			
		有	無	1	2	3	町内	町外	県外	未記入
赤ちゃん教室の参加	(39) 有	36	3	20	14	5	11	16	1	11
	(10) 無	8	2	5	4	1	1	6	1	2

開催要領、実績について表1に示す。

このうち平成3年12月現在I町に居住している75名に対して教室の満足度を知るため、郵送にてアンケート調査を実施した（回収率65.3%）。

回答者の内訳を祖父母同居、出生順位、母の出身地別に表2に示す。

参加しての感想を3つまで選択させると以下のようであった。

1)身体計測により赤ちゃんの発育を知った　27.4 %

2)抱えている心配や問題が緩和された　16.0 %

3)母親同士の交流ができた　13.2 %

4)赤ちゃんの発達を知ることができた　11.3 %

5)乳児健診に参加しやすくなった　11.3 %

6)予防接種等町の保健衛生事業を知った　4.7 %

7)相談できる友達ができた　0.9 %
8)説明が一般的であった　6.6 %
9)待ち時間が長かった　2.8 %
10)参加者が少なく残念　3.8 %
11)そ の 他　2.0 %

回答者の８割が参加した経験があり、まとめると、教室に参加して良かった（1～7）が85%、不満足である（８～11）が15%であった。今後の教室運営の参考にするため、不参加者１０名の理由を調べて見ると多い順に、仕事が休めなかった（４名）、赤ちゃんの体調が悪かった（３名）、家族の都合（１名）時間帯が悪い（１名）、その他（１名）であった。子育てに関して気軽に話せる人の有無を家族形態別に表３に示すが、75.5%の人が「いる」と回答している。また育児について家族での話し合いは、全体の９割が「している」と答えているが、実際には育児について相談する相手として核家族、同居を問わず、「友人」次いで「実家の母」と答えているものが圧倒的に多い。

表３

内訳 / 家族形態	いる	身近にいない	いない
核家族	5	0	0
同　居	32	9	3
全　体	37	9	3

3.乳幼児健診から事後指導のあり方について

健診等で発見された経過観察児（ちょっと気になる子）の早期療育のために幼児教室を昭和６０年度から開設してきた。３歳児健診の事後指導を目的にスタートした教室であるが、開設当初から乳児、１歳６カ月健診対象児の参加もみられていた。しかし、平成２年度の新規参加児の年齢構成を見ると、３歳未満が７名（63.6%）、３歳～５歳が４名（36.4%）で最近は低年齢化が目立つ。これは教室のスタッフとして保健所、町村保健婦が係わり、学習を積み重ねた結果、乳幼児健診等で母親や子供の小さなサインを見逃さなくなったことによるものと思われるが、同時に母親自身による「ちょっと気になる」気づきが早まってきたことも上げられる。しかし、家族間での異常や心配事についての意見の食い違いが早期療育につながらない事例も何例か見られた。

考察

五城目支所では日中の保育者となることが多い祖父母が抱える問題を解決するために、孫親学習会を開催したが、実際の参加者は少ないものの育児に関して祖父母の役割の大切さを認識してもらうよい機会となり、明日への糧になるとの声も聞かれた。ほとんどが孫について家族で話し合いの機会を持っているが、意見の食い違いもみられることがわかった。

母親の交流と児の観察のための場づくりとして開催してきた赤ちゃん教室への参加

率は、平成２年度74.5%、平成３年度69.9%と横ばいであった。参加者の満足度を把握するために実施したアンケート調査の結果からは、ほぼ開催目的が達成されていることが分かったが、開催時間帯や内容等については検討する必要がある。たとえば親たちのグループ活動の手掛かりにするために、社会教育担当者（公民館等）との連携もひとつの方法と考えられる。

赤ちゃん教室の対象となる母親は、家族間で育児の話し合いをしているとおおむね答えているが、実際に育児に関して悩み等を相談あるいは気軽に話せるのは「友人」、「実家の母」と答えている人が多く、家族以外の人が相談相手になっていた。

赤ちゃん教室、父母学習会の内容を検討しながら継続し、時にはドッキングさせるなど、家族ぐるみでの育児参加のあり方を検討していく必要がある。

出生数は年々減少しているが、「ちょっと気になる子」の気づきを早め、早期療育に結びつけるには、心配事を共有できる家族関係が必要であるとともに、相談窓口の充実と住民へのＰＲを十分にしていく必要がある。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:当支所では、家族の育児参加についての検討から、平成2年度からI町において母親の交流と児の観察の場づくりとして「赤ちゃん教室」を開催した。また平成3年度は、日中の保育者である祖父母の抱える問題を解決するため「孫親学習会を開催した。「赤ちゃん教室」や「孫親学習会」の評価をするとともに、アンケート調査の結果を参考に、今後の乳幼児健診事後指導や家族の育児参加および幼児教室運営のあり方について検討した。